

薩摩辞書の編纂法の考察

三好 彰

キーワード: 薩摩辞書、英和对訳袖珍辞書、
和訳英辞書、和訳英辞林、
ウェブスター辞書

要旨

幕末に出た『英和对訳袖珍辞書』はその後改訂され、第2版に当たる『改正増補 英和对訳袖珍辞書』が出版された。そして明治初頭には、この『改正増補 英和对訳袖珍辞書』に見出し語の追加・削除を行い邦訳を見直した『和訳英辞書』（『英和对訳袖珍辞書』の第3版に相当）と『和訳英辞林』（第4版に相当）が刊行された。この『和訳英辞書』と『和訳英辞林』は薩摩学生の名で刊行されたので「薩摩辞書」と呼ばれている。

『英和对訳袖珍辞書』、『改正増補 英和对訳袖珍辞書』、『和訳英辞書』および『和訳英辞林』の全ページの文字列を取り入れた写本をパソコン上に作り上げた。これにより見出し語の追加と削除の状況を数値的に明らかにした。そして、これらの辞書における邦訳内容を見出し語毎にパソコンで逐一比較して改訂内容をつぶさに調べ上げた。

これらによって『和訳英辞林』がその序文で述べているように誤謬の訂正に力を注いだことが数値的に明らかにできた。『和訳英辞林』は『英和对訳袖珍辞書』の完結版とみなせる。

『和訳英辞林』はその序文で Webster 辞書から見出し語を凡そ八千語追加したと述べている。しかし、Webster 辞書のどの版を用いたかは明記されていない。そこで追加された見出し語のほか、削除された見出し語さらに邦訳の見直しを含めた改訂状況を精査することで、使用した版をほぼ特定することができたが確定するまでに至らなかった。今後の課題である。

1. はじめに

明治初頭に薩摩の学生が2つの英和辞書を相次いで刊行した。『改正増補 和訳英辞書』（高橋新吉編 1869）と『大正増補 和訳英辞林』（前田正毅・高橋良昭編 1871）である。なお以下では簡便のため前者を『和訳英辞書』、後者を『和訳英辞林』と略称する。『和訳英辞書』の

序文の筆者が薩摩学生になっており、『和訳英辞林』では序文の筆者が薩摩学生の前田正毅と高橋良昭になっているので、両辞書を併せて薩摩辞書と通称されている。

これまでの薩摩辞書の研究は一部の見出し語を選択的に取り出すサンプリング手法でなされてきた(豊田實 1939:40、井田好治 1963:153、杉本つとむ 1985:425-426)。この手法の持つ統計的なリスクを避けるために筆者はパソコン上に両辞書の全ページの文字列を入れた写本を作りあげてすべての見出し語を対象として編纂法を考察した。つまり電子的写本による一種のビッグ・データ情報処理である。

精しい数値は後述するが概数を紹介すると、『和訳英辞書』と『和訳英辞林』およびそれらの底本である『改正増補 英和对訳袖珍辞書』の3つの辞書の総計で、見出し語総数は11万、邦訳の総数は18万、合せて29万である。これをもととして見出し語の追加と削除、邦訳数、邦訳の改訂状況などのデータも加えて情報処理を行った。このデータを種々の観点で分類、統合することによって改訂の実態が分かり、邦訳の改訂状況が把握できた。

なお本稿では次のものをイタリックで表記する。まず、品詞の略号(後述)と、他の語を参照することを示す“*see*”をイタリック体で示す。これは『英和对訳袖珍辞書』およびそれに続く3つの改訂版で採られている表記に従ったものである。また、オランダ語とポルトガル語を参照する際には、英語と区別するためにイタリック体で記す。先に述べた品詞の略号や“*see*”との混乱が起らないようにするため、オランダ語とポルトガル語を参照する際はその都度、言語名を明記する。

2. 薩摩辞書の刊行の狙い

2.1 底本である堀越亀之助編(1866)のバリエーション

『和訳英辞書』は、その序文に書かれているように堀越亀之助編の『改正増補 英和对訳袖珍辞書』(堀越亀之助編 1866)を底本としている。以下では簡便のために『改正増補 英和对訳袖珍辞書』を『改正袖珍辞書』と略称する。

堀越亀之助編(1866)に4つのバリエーションがある(三好彰 2010)。そのバリエーションは、見出し語の *Neighbour* が正しく綴られているものと *Feighbour* のように誤植になっているもの、および見出し語が *Turnsol, s.*¹ であって邦訳欄が空白のものと、見出し語が“*Turnsol, see Girasole*”となっていて邦訳欄が空白のものである。この組み合わせで4種のバリエーションが現存する。

ここで、『和訳英辞書』がこの4つのバリエーションのどれを底本としたかを特定する。『和訳英辞書』、『和訳英辞林』では *Neighbour* が *Neighbor* と米国英語綴りになっている。

『和訳英辞書』では「*Turnsol, s.* 向日葵」であり、『和訳英辞林』では「*Turnsole, s.* 向日葵」である。

このことから『和訳英辞書』の底本は、堀越亀之助編(1866)の4つのバリエーションのうち、*Neighbour* の綴りが正しく、かつ、*Turnsol* の見出し中に *see Girasole* が含まれていないもの

¹ *Turnsol* を現在では *Turnsole* と綴るが、OED(2009)には *Turnsol* と綴る例も出ている。

であることが分かる。

2.2 薩摩辞書の系譜

『和訳英辞書』の序文に刊行の狙いが次のように述べられている。

(前略) 先ニ堀先生英ノ字典ヲ譯スルニ我皇國ノ語ヲ以テシテ此學に志タル者ノ羽翼トセリシカレドモ往、謬語欠字等アリテ且遺漏ナキニシモ非ズアルヲ堀越先生其謬誤ヲ改メ畧語を加ヘタリハシメニ比スレハイトヨロシクハナリタレド學者の輩ニハ猶アカヌ所アルヲ以テコノタビアメリカ教師等ニ倚リ更ニ改メ正シ今世不用ノ英語ヲ省キ必用ノ文字ヲ補ヒ加ヘ且口調ヲ誤ランガ爲吾片假名ヲホトリニ屬ケ又吾漢字ニモ施シテ童蒙ニ便宜ヲ得セシメ (後略) (引用文中の太字強調は本稿で加えた)

ここに書かれている「堀先生」とは、文久2年(1862年)に刊行された『英和对訳袖珍辞書』の編者であり、「堀越先生」とは慶応2年(1866年)に刊行された『改正増補 英和对訳袖珍辞書』の編者である。この記述から、『和訳英辞書』が直接には『改正増補 英和对訳袖珍辞書』をもとにしたことが分かる。

そして2つの薩摩辞書の表題は日本語表記とともに英文表記があり、それぞれ THIRD EDITION REVISED, FOURTH EDITION REVISED と書かれており『英和对訳袖珍辞書』の改訂第3版、第4版であることを表明している。

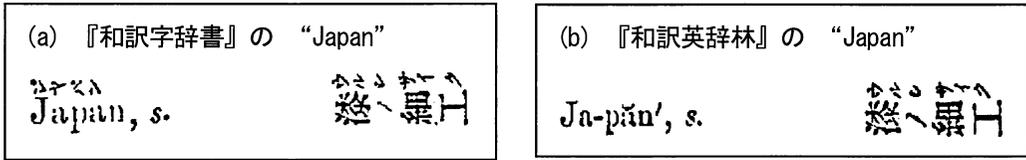
『和訳英辞林』の序文で次のように刊行の趣旨を述べている。

明治己巳ノ歳予等上海ニ於テ改正増補和譯英辭書を刊版シ既ニ星霜二周ヲ過タリ抑モ時勢開化ノ運ニ屬シ學業技芸ノ精巧日ニ新ニ月ニ進ム前ニ出版セシ辭書ノ如キモ亦其盡サルヲ知ル且ツ前版ハ部數許多ナラス今又消磨ニ屬ス故ニ此度堀孝之等ト共ニ謬語缺漏ヲ改正編集シウエブストル氏ノ辭書ヨリ緊要ナル者凡ソ八千餘語ヲ抜粹ス又前本ニハ英語ノ傍ニ片假名ヲ以テ口調ヲ施スト雖モ音声ノ高下及ヒ字綴ヲ明辨スル能ハス故ニ今片假名ヲ省キウエブストル氏ノ辭書ニ據テ是ニ易ルニ音符並ニ字綴ヲ以テス (後略) (引用文中の太字強調は本稿で加えた)

『和訳英辞書』に Webster 辞書から見出し語を大幅に加えたこと、およびカタカナで示していた英語の発音を Webster 辞書流儀に変えたと述べている。薩摩辞書の英語の発音記号の件は先行研究 (井田好治 1963:158、杉本つとむ 1985:427) に詳しいので本稿では論じない。

『和訳英辞書』で和訳中の漢字の読みをルビで示すようにしたことが序文に書かれているが、『和訳英辞林』にも引き継がれている。Japan を例として図 2.1 に『和訳英辞書』と『和訳英辞林』の表記を示す。

図 2.1 『和訳英辞書』と『和訳英辞林』の表記例 “Japan”²



なお本稿で薩摩辞書の用例を引用する際に、特に断らない限り煩雑さを避けるために英語の発音記号と漢字のルビを省く。また『改正袖珍辞書』と薩摩辞書は英語を横書き、日本語を縦書きに書いているが、本稿では読みやすさのために日本語も横書きで引用する。

なお『英和对訳袖珍辞書』の初版（堀達之助編 1862）と改訂増補版（堀越亀之助編 1866）の英語部分は活版印刷で、日本語部分は木版で印刷された。

慶応 3 年(1867 年)に英語部分も木版印刷にした『改正増補 英和对訳袖珍辞書』（堀越亀之助編 1867）が刊行された。日本語の部分は慶応 2 年(1866 年)版の木版を流用したが、木版に変えた英語に若干ながら誤植がある。そして明治 2 年(1869 年)に慶応 3 年(1867 年)版の増刷版を蔵田屋清右衛門が刊行した（堀越亀之助編 1869）。

『和訳英辞書』と『和訳英辞林』は英文表記の表題に書かれているように上海 Shanghai の American Presbyterian Mission Press³ で英語部分も日本語部分も活版印刷で印刷された。

3. 薩摩辞書の構成

『改正袖珍辞書』、『和訳英辞書』および『和訳英辞林』の見出しには、単語とともに句と例文があるが、それらを総称してエントリーと呼ぶことにする。本節ではこの 3 つの辞書のエントリーの件数、薩摩辞書（『和訳英辞書』および『和訳英辞林』）におけるエントリーの追加と削除の状況、およびこれらをもとにして準拠したと述べている Webster 辞書の底本を検討する。

3.1 エントリーの件数に見る辞書の規模

薩摩辞書は序文でエントリーの追加と削除を行ったと述べている。底本の『改正袖珍辞書』のエントリー数は 35,083 である。これにエントリーを 530 件追加し、187 件削除して『和訳英辞書』を作っておりエントリーの総数は 35,426 である。

そして『和訳英辞書』にエントリーを 5,475 件追加し、1,801 件削除して『和訳英辞林』を作っておりそのエントリーの総数は 39,100 である。これらの関係を表 3.1 に示す。

² Japan の邦訳に「日本」が無いのは『英和对訳袖珍辞書』が底本とした Picard, H. & Maatjes(1857) が固有名詞を巻末の表 *ALPHABETISCHE LIJST* に英語とオランダ語を対応させて載せることにより辞書本文から固有名詞を削除したためである。この表は邦訳されなかった。この表に英語とオランダ語で同じ綴りなので紛らわしいが *Japan, m. Japan* がある(m. はオランダ語の男性名詞の略称)。

³ 上海の American Presbyterian Mission Press で印刷された先例にヘボン著『和英語林集成』（Hepburn 1867）がある。また薩摩学生が『獨和字典』（松田爲常等 1873）を同所で印刷した。

表 3.1 エントリー数の関係

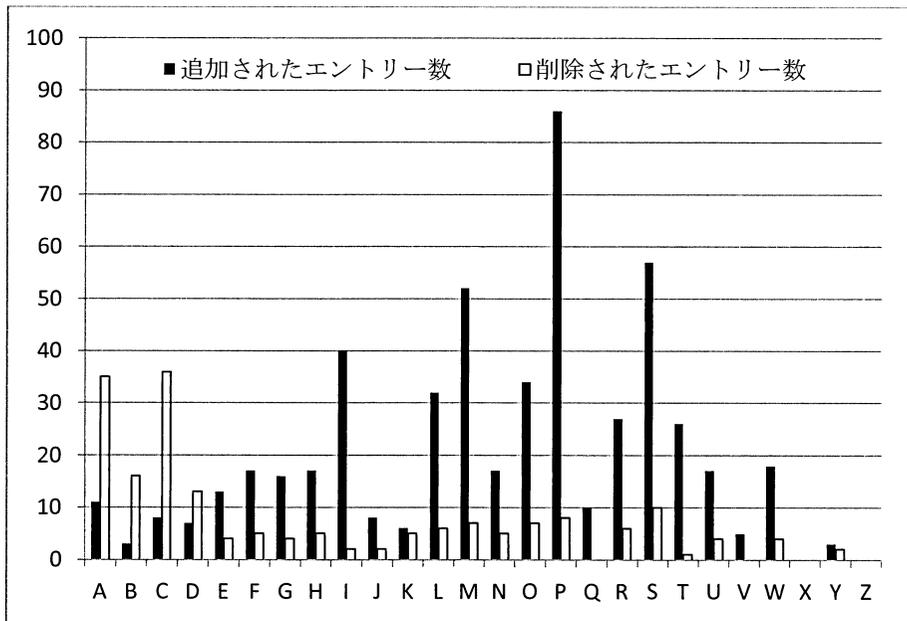
	改正袖珍辞書	和訳英辞書	和訳英辞林
エントリーの追加	---	530	5,475
エントリーの削除	---	187	1,801
エントリー総数	35,083	35,426	39,100

『和訳英辞林』の序文に「ウエブストル氏ノ辞書ヨリ緊要ナル者凡ソ八千餘語ヲ抜粹ス」とあるが、追加するときと削除するときの両方に「ウエブストル氏ノ辞書」を使ったなら、その総計で7,276 (5,475+1,801) である。さらに『和訳英辞書』の分を考慮すると『改正袖珍辞書』から約2千のエントリーを削除し新たに約6千のエントリーを追加した計算となり、序文の表現にほぼ符合する。このように『和訳英辞書』で追加、削除を試行し、『和訳英辞林』で一桁上の大ナタを振るったと見なせる。なお、この「ウエブストル氏ノ辞書」については後述する。

3.2 薩摩辞書へのエントリーの追加、削除の分布

『改正袖珍辞書』に530件のエントリーを追加し、そして187件のエントリーを削除して『和訳英辞書』が作られたが、その追加と削除の件数をエントリーの頭文字のアルファベット毎に分けて図3.1(a)に掲げる。

図 3.1 (a) 『和訳英辞書』へのエントリーの追加と削除の分布



『和訳英辞書』に5,475件のエントリーを追加し、1,801件のエントリーを削除して『和訳英辞林』が作られたが、その追加と削除の件数をエントリーの頭文字のアルファベット毎に分けて図3.1(b)に掲げる。

図 3.1 (b) 『和訳英辞林』 へのエントリーの追加と削除の分布

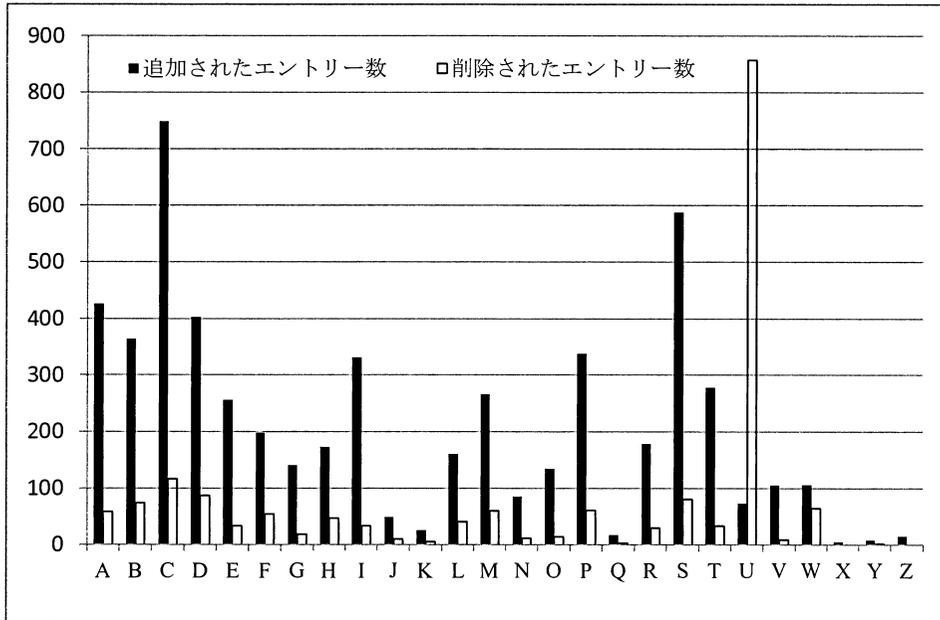


図 3.1 (a) が示すように『和訳英辞書』では頭文字が P のエントリーの追加件数が抜きんできて多く、ついで S, M, I, L が続く。削除されたエントリーで件数が多いのは頭文字 C と A である。

『和訳英辞林』ではエントリーの追加と削除の総件数は『和訳英辞書』より一桁多い。追加されたエントリーの件数が目立って多いのは頭文字 C と S であり、ついで A, D, P, I が続く。削除されたエントリーでは頭文字 U が飛びぬけて多くその他はほぼ横並びである。

『改正袖珍辞書』では頭文字が U であるエントリーには、たとえば *Unaccepted, adj.*⁴ がある。ところでこの *Unaccepted, adj.* に対応する *Accepted* のほうはエントリーに含まれていない。このように、接頭辞 *un-* を含む語はエントリーとして挙げられているが、対応する *un-* を含まない語がエントリーとして挙げられていない事例が 800 以上もある。『英和对訳袖珍辞書』(堀達之助編 1862) はオランダで刊行された英蘭・蘭英辞書 (Picard & Maatjes 1857) の英蘭部からエントリーを持ってきている (杉本つとむ編 1981:696、三好彰 2007:89) が、英語辞書としては異例である。それを Webster 辞書をもとにして『和訳英辞林』で整理したと考えられる。

⁴ 『英和对訳袖珍辞書』では見出し語の品詞名を英語の略号 (イタリック体) に次のように対応させている。

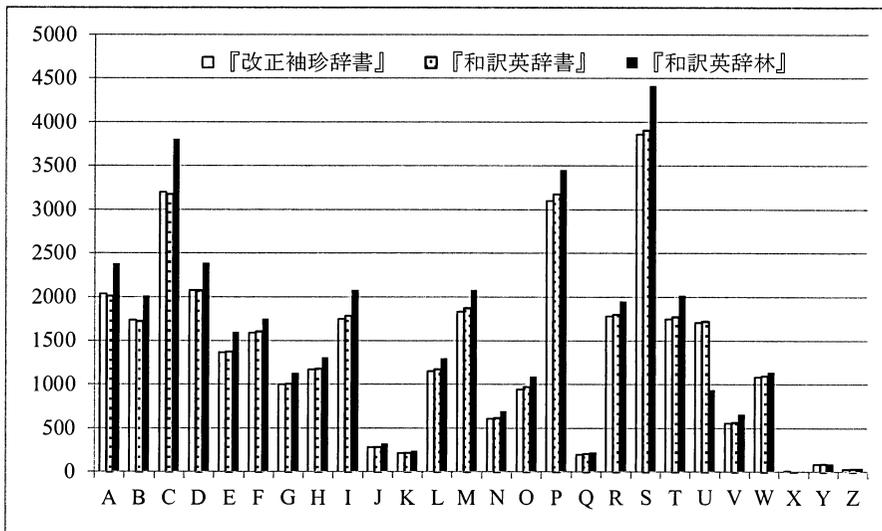
略号	<i>adj.</i>	<i>adv.</i>	<i>art.</i>	<i>conj.</i>	<i>interj.</i>	<i>prep.</i>	<i>pron.</i>	<i>s.</i>	<i>v. a.</i>	<i>v. n.</i>
品詞名	形容辞	副辞	冠辞	接續辞	間投辞	前置辞	代名辞	實名辞	他動辞	自動辞

本稿はこれに準ずる。ただし品詞の名称は「形容辞」などでなく現代流の「形容詞」などを用いる。

『改正袖珍辞書』、『和訳英辞書』および『和訳英辞林』におけるエントリーの個数を頭文字のアルファベット毎に図 3.1 (c) に示す。

図 3.1(c) が示すように、『和訳英辞書』でのエントリーの追加、削除では辞書の編成法を変えるほどではない。しかし『和訳英辞林』では頭文字が U であるエントリーが半減しているのが先ず目立つが、そのほかに追加と削除を併せて 500 語以上の改訂がなされているのは頭文字の A, C, S であり、100 語以下の改訂は頭文字で J, K, Q, X, Y, Z であって図 3.1 (c) に示すように『和訳英辞林』で辞書の構成が大幅に変わっている。

図 3.1 (c) 『改正袖珍辞書』、『和訳英辞書』、『和訳英辞林』のエントリー数の分布



3.3 エントリーの改訂状況による「ウェブストル氏ノ辞書」の考察

『和訳英辞林』の序文に「堀孝之等ト共ニ謬語缺漏ヲ改正編集シウェブストル氏ノ辞書ヨリ緊要ナル者凡ソ八千餘語ヲ抜粹」とあって「ウェブストル氏ノ辞書」から新しいエントリーを取り込んだことが書かれている。堀孝之は堀達之助の次男 (堀孝彦 2016) であるが、薩摩藩士となって五代友厚などと慶応元年(1865 年)に英国へ密航した薩摩藩士一行(犬塚孝明 1974、門田明 1991、三好彰 2015)の英語の通訳を務めた英学の先駆者である。その五代の伝記資料(日本経営史研究所編 1974: 197)に「スモール・ウェブストルヨリ選擢シテ和訳英辞書ニ不足ノ英語ヲ増加スベキコト」という記事がある。この記事の著者と書かれた時期は不明だが『和訳英辞林』の編纂を始める段階で、特定の「ウェブストル氏ノ辞書」に決めていたと受け取れる。

なお明治初頭までに刊行されていた「スモール・ウェブストル」に該当する Webster 辞書がいくつかあり、日本に将来していたことが古くから考察されてきた (岩崎克己 1935: 62-64)。

3.3.1 追加されたエントリーと Webster 辞書

Webster 辞書の版を特定するには『和訳英辞書』に追加されたエントリーが採録されたか否かが手がかりになる。これらのエントリーを含む Webster 辞書の版を探せばよいからである。

管見の範囲で、この条件に近いのは Webster (1868) である。

その理由として図 3.1(b) に示した追加されたエントリーの件数が一番多いのは頭文字が C の 749 件であるが下記の 4 つのエントリーを除いた 745 件が Webster (1868) に採録されていることがある。

Capitular⁵, *adj.*: Circummured, *adj.*: Cumulatist, *s.*: Cyclops, *s.*

さて、『和訳英辞林』で削除された件数が 857 件と圧倒的に多いのが頭文字が U のエントリーだがその削除⁶されたすべてのエントリーが Webster (1868) に採録されていないのも好材料である。

これらはよいのだが『和訳英辞林』に採録されている頭文字が U のエントリー 937 件のうちの 382 件が Webster (1868) に採録されていないのが問題となる。例を挙げると Unaccessible, *adj.* や Unacquainted, *adj.* などいずれも接頭辞 un- で始まるエントリーである。

五代の伝記資料(日本経営史研究所編 1974: 197) は「スモール・ウェブストルヨリ選擧シテ和訳英辞書ニ不足ノ英語ヲ増加スベキコト」と言っており、エントリーの追加を指示しているが削除について指示していない。それでも Webster (1868) から見るとこの 382 件を削除しなかったのは見落としと片づけるわけに行かないほどの量である。何らかの理由があったかもしれないので今後の課題とする。

3.3.2 改訂内容と Webster 辞書

『和訳英辞林』が参照した Webster 辞書の版を特定する上で、もう一つのヒントは『和訳英辞書』と『和訳英辞林』でまったく意味が異なるように改訂されている 8 件のエントリーの存在である。これらの改訂に Webster 辞書を用いたことが考えられる。それら 8 件を表 3.2 に示す。

ところで表 3.2 の最初の Anointed は OED (2009) によると次の意味がある。

- Smear'd or rubb'd with any unctuous matter
- Consecrated, sacred
- A consecrated one. the Lord's Anointed: Christ or the Messiah; also, a king by 'divine right.'

『和訳英辞書』ではエントリー Anointed, *adj. et s.* の邦訳は「膏薬ヲ塗り附タル、命ヲ請タル人」であり、『和訳英辞林』ではエントリーの品詞を名詞だけにした Anointed, *s.* の邦訳を「救世主(キリストヲ云)」としている。どちらの邦訳も正しく、互いに相補的である。他の 7 つのエントリーもその邦訳は同じように相補的である。

さて Webster (1868) が Anointed に The Messiah の意味を与えているのはよいとして Webster (1868) には Beancod, Collar of brawn, Crapulous がエントリーとして採録されていない。従って Webster (1868) は、『和訳英辞林』の Beancod, Collar of brawn, Crapulous の改訳の典拠にはなっ

⁵ この先頭の Capitular, *adj.* について述べると、『和訳英辞書』が Capitular, *adj. et s.* としていたエントリーを『和訳英辞林』で Capitular, Capitulary, *s.* と Capitular, *adj.* の 2 つのエントリーにしているのだが、その次のエントリーが Capitulary, *adj.* なのでエントリーの均衡のために Capitar, *adj.* を追加したと考えられるので Webster (1868) に採録されていないものの妥当な追加と見なせる。他の 3 つのエントリーにも同様の妥当性が見い出せるが紙面の関係でその説明を省く。

⁶ なお『和訳英辞書』から削除された多くのエントリーを OED (2009) で確認すると Obs.(Obsolete) ないし Rare としているものが目立ち、削除の妥当性が伺える。

ていないと考えられる。

なお表 3.2 の『和訳英辞林』の 8 件の邦訳に相当するのは管見で Webster (1862) である。Webster (1868) に採録されていない上述の 3 つのエントリーを Webster (1862) で引くと次の通りであり、『和訳英辞林』の邦訳に符合する。

Beacon, <i>s.</i>	A small vessel used in the rivers of Portugal
Collar of brawn	The quantity bound up in one parcel
Crapulous, <i>adj.</i>	Surcharged with liquor; sick by intemperance.

表 3.2 『和訳英辞書』と『和訳英辞林』で異なる意味に改訂されているエントリー

	『和訳英辞書』	『和訳英辞林』	Webster 1868
Anointed, <i>adj. et s.</i>	膏薬ヲ塗り附タル、命ヲ請タル人	救世主 (キリストヲ云)	The Messiah
Beancod, <i>s.</i>	豆莢	ポルトガルノ川船	採録せず
Collar of brawn	管ノ様ニ巻キタル猪肉	一包ノ物ノ量	採録せず
Crapulous, <i>adj.</i>	鶉呑ミニスル	酔タル	採録せず
Hearts' ease, <i>s.</i>	堇ノ一種 一花三色	心ノ落付タルヲ	1. Peace of Mind 2. A species of violet
Invoice, <i>s.</i>	商ヒ荷物	商ヒ荷物ノ代價書	A written account or bill of the particulars of merchandise sent to a purchaser, consigner, &c.
Leading, <i>s.</i>	導ビク ⁷ 、案内スル ⁷ 、差配	鉛、鉛板	Lead, or sheets or articles of lead collectively
Locomotive or locomotive engine	己レガ思ウ通りニ動ク ⁷ ノ出来ル活物ノ力	蒸気車 (旅客又荷物ヲ運送スルニ用ユ)	A wheel-carriage supporting and driven by a steam-engine

3.3.3 エントリーの記法と Webster 辞書

1 例として Japanese を取り上げて図 3.2 に『和訳英辞林』と Webster (1868) のエントリーの記法を示す。

『和訳英辞林』の序文で Webster の記法に拠ったと述べているが、Webster (1868) の記法と符合するが、Webster (1862) の表記にこのような工夫は見られない。

⁷ ⁷ は「事」の略字である

図 3.2 『和訳英辞林』と Webster (1868) のエントリーの記法の例



3.3.4 スモール・ウェブストルのまとめ

『和訳英辞林』が利用した可能性が高いのは Webster (1868) であるが、筆者が参照できていない他の版の Webster 辞書があることもあり、どの版を使ったかを特定することは今後の課題とする。

なお『英和对訳袖珍辞書』の初版 (堀達之助編 1862) の編纂にあたり、当初は底本を Picard (1843) としていたが途中で Picard & Maatjes (1857) に切り替えた (三好彰 2007)。顰に倣えば『和訳英辞林』も複数の Webster 辞書を使ったかもしれない。

3.4 薩摩辞書のエントリーの改訂についての附言

『和訳英辞書』で削除されたが『和訳英辞林』で復活したエントリーがあり、また『和訳英辞書』に追加されたが『和訳英辞林』で削除されたエントリーがある。それらの件数は多くないものの『和訳英辞書』と『和訳英辞林』の編纂法の違いが垣間見える。

3.4.1 『和訳英辞書』で削除されたが『和訳英辞林』で復活したエントリー

『和訳英辞書』で削除されたが、『和訳英辞林』で復活したエントリーが表 3.3 のように 14 個ある。

表 3.3 の先頭に出ている Apparitor の邦訳は『改正袖珍辞書』では「使ヒ 学校又寺院等ノ」であり、『和訳英辞林』では「裁判役 (寺院ノ)」であって意味が異なっているが、OED (2009) に両義⁸が出ているのでどちらも間違いではない。その他のエントリーも過半数の邦訳に改訂がなされたうえで復活している。

なお表 3.3 に書き入っていないが、『改正袖珍辞書』では Odour と英国英語綴りであるが、『和訳英辞林』では Odor と米国英語綴りに変わっている。このように『和訳英辞林』が米国英語綴りに変えている例 (井田好治 1963:160) が他にも 100 件近くあるが、変えていないケースも散見される⁹。『和訳英辞林』では Webster 辞書を利用したので米国英語綴りが多くなったわけである。

⁸ OED (2009) によると Apparitor に “The servant or attendant of an officer or authority” と “A herald, pursuivant, usher” の意味がある。

⁹ 『和訳英辞林』に英国英語綴りの残っている例：Straw-colour, Laboursome

表 3.3 『和訳英辞書』で削除されたが『和訳英辞林』で復活したエントリー

	『改正袖珍辞書』	『和訳英辞林』
Apparitor, <i>s.</i>	使ヒ 学校又寺院等ノ	裁判役 (寺院ノ)
Aqua-fortis, <i>s.</i>	硝石精	硝石酸
Babe ¹⁰ , <i>s.</i>	小兒	小兒
Blanch-ed-ing, <i>v. a. et n.</i>	白クスル、白クナル、逃ル、空クスル、青白クスル、皮ヲ剥グ、殻ムク	白スル、白ナル、逃ル、空クスル、青白クスル、皮ヲ剥グ、殻ムク
Blockishness, <i>s.</i>	愚鈍	愚鈍、愚昧
Cinquefoil, <i>s.</i>	蛇盆 (ヘビイチゴ)	蛇盆 (ヘビイチゴ)、窗ノ飾
Curvity, <i>s.</i>	曲折	曲リタルヲ
Literati, <i>s. pl.</i>	孝者	博學ナル人
Mostly, <i>adv.</i>	多分ハ、通例、尋常	重ニ、就中
Odour, <i>s.</i>	臭ヒ、香	香氣
Pine-apple, <i>s.</i>	鳳梨	草ノ名又其實
Reimpregnate-ed-ing, <i>v. a.</i>	再ビ孕マセル	再ビ孕マセル
Silvely, <i>adv.</i>	銀ノ如ク	銀ノ如ク
Splutter, <i>s.</i>	騒動	騒ギ

3.4.2 『和訳英辞書』に追加されたが、『和訳英辞林』で削除されたエントリー

『和訳英辞書』に追加されたが、『和訳英辞林』で削除されたエントリーが表 3.4 に示すように9つある。なお、これら9つのエントリーは Webster (1868) に採録されていない。

表 3.4 『和訳英辞書』で追加されたが『和訳英辞林』で削除されたエントリー

Abinitio, <i>s.</i>	始ヨリ
Croupies, <i>s.</i>	骨牌遊ニ金ヲ集ル人
Groaning, <i>s.</i>	歎キ、後悔、呻クヲ
Inlaying, <i>s.</i>	全上スルヲ
Lengthways, <i>adv.</i>	全上ノ向キニテ、堅ノ向キニテ
Loitering, <i>s.</i>	延引
Unadultrated, <i>adj.</i>	偽リノナキ
Untruthful, <i>adj.</i>	不信ノ、實ナキ
Woory, <i>adj.</i>	濕リタル、ドロドロシタル

3.5 エントリーに与えられた邦訳の件数

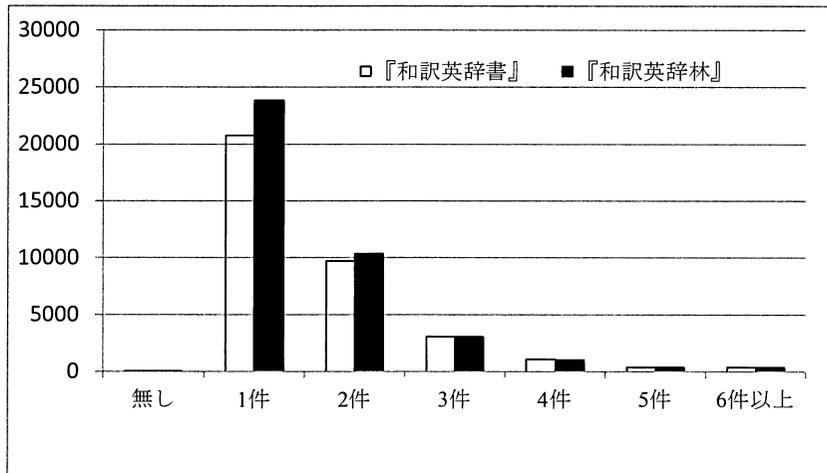
表 3.3 や表 3.4 に示した例にもあるように1つのエントリーに複数の邦訳が与えられているケ

¹⁰ 豊田實 (1939: 40) に『和訳英辞林』に Babe が加えられたとする記事があるが、正しくは『改正袖珍辞書』にあった Babe が『和訳英辞書』で削除され『和訳英辞林』が復活させた。

ースが少なくない。たとえば表 3.4 で *Groaning, s.* には「歎キ、後悔、呻ク」の 3 つの邦訳が付けられている。

『和訳英辞書』と『和訳英辞林』における 1 つエントリーあたりの邦訳の件数の分布状況を図 3.3 に示す。

図 3.3 『和訳英辞書』と『和訳英辞林』におけるエントリーあたりの邦訳件数



邦訳件数が「無し」とは、たとえばエントリーが *Alarum, see Alarm* であって他のエントリーを参照していて邦訳が与えられていないケースである。ただし、このケースを『和訳英辞林』では同様に扱っているケースと、たとえば *Cypher, see cipher* の邦訳部を「サイフルヲ見ヨ」のようにしているケースとがあって両ケースが混在している。表 3.4 では「サイフルヲ見ヨ」を邦訳と見なした。

表 3.4 で『和訳英辞林』で邦訳が 1 件のケースと 2 件のケースが増えているのは、『和訳英辞林』で追加されてエントリーの邦訳のはほぼすべて(数値で言うとエントリー件数の 98%強)の邦訳の件数が 1 ないし 2 であることによっている。

ところで『改正袖珍辞書』には意味が分からなかったためであろうか、邦訳が与えられていないエントリーが次のように 5 つある¹¹。

Horse-back, Litharge, Tumsol, Vanquishment, Yolk

この 5 つのエントリーのうち、はじめの 3 つに対しては『和訳英辞書』では「*Horse-back, s.* 馬ノ背」、「*Tumsol, s.* 向日葵」、「*Yolk, s.* 蛋黄」と邦訳が付けられ『和訳英辞林』にもそのまま引き継がれている。

Litharge と *Vanquishment* に対しては『和訳英辞書』でも邦訳が付けられていないままである。そして『和訳英辞林』は *Vanquishment, s.* に「打ち勝ツ」¹²と邦訳を付けたが、*Litharge* は削除されておりエントリーに無い。なお *Litharge* は Webster (1868) に採録されている。

¹¹これら 5 つのエントリーに堀達之助編 (1862) が邦訳を与えられていないのが真因である。

3.6 エントリーの邦訳の改訂状況

『改正袖珍辞書』にエントリーを追加、削除して『和訳英辞書』を作ったわけだが、多くのエントリーを『改正袖珍辞書』から引き継いでいる。その引継ぎに当たって邦訳の扱い方は3つに分類できる。すなわち意味を変える改訂をしたケース、意味は変えないで表現形式を見なおしたケース、そして邦訳をそのまま引き継いだケースである。『和訳英辞林』も『和訳英辞書』との関係で同じようにこの3つに分類できる。

なお「意味は変えないで表現形式を見なおしたケース」とは漢字の書体や送り仮名を変えたが邦訳の意味を変えていないケースである。1例としてエントリー *Arborist, s.* を挙げると『改正袖珍辞書』では「樹木ノ莖ニ達シテ居ル人」であるが、『和訳英辞書』では「樹木ノ學ニ達シタル人」であり、漢字の書体を含めて表現が少し変わっているが意味は変えていない。

この3つの分類を簡便のために、「改訂」、「形式見直し」、「改訂なし」と言い直して、『和訳英辞書』と『和訳英辞林』の改訂状況をエントリーの件数で示すと表3.4のようになる。

表 3.4 『和訳英辞書』と『和訳英辞林』の改訂状況

	改訂	形式見直し	改訂なし
『和訳英辞書』	829	12,622	21,445
『和訳英辞林』	424	3,947	29,254

(a) 『和訳英辞書』における改訂の状況

表3.4の『和訳英辞書』で「改訂なし」は21,445件であり、全エントリー中の61%である。「形式見直し」は12,622件であり、全エントリー中の36%強である。つまり「改訂なし」と合わせると意味を変えていないケースが97%強になり、基本的には『改正袖珍辞書』の邦訳を引き継いでいる。

「改訂」は邦訳の意味を変えているケースであり、全数で829件なので総エントリー数の2%強程度である。このなかには複数ある邦訳に追加や削除を行うケースが多いのだが、それ以外として序文に「堀越先生其謬誤ヲ改メ畧語を加ヘタリハシメニ比スレハイトヨロシクハナリタレド學者の輩ニハ猶アカヌ所アルヲ以テコノタビアメリカ教師等ニ倚リ更ニ改メ正シ」とあるように『改正袖珍辞書』で誤訳になっている邦訳を見なおしたのがある。誤訳を訂正している1例を挙げると、『改正袖珍辞書』が *Convex, s.* を「凹圓體」と誤訳しているのを『和訳英辞書』は「凸圓體」に訂正している。

(b) 『和訳英辞林』における改訂の状況

表3.4の『和訳英辞林』で「改訂なし」とは『和訳英辞書』が与えている邦訳をそのまま使っているケースであり29,254件である、全エントリー中の75%にあたる。

「形式見直し」は3,947件であり、全エントリー中の10%である。つまり「改訂なし」と合わせると意味を変えていないケースが85%になり、基本的に『和訳英辞書』の邦訳を引き継いでいる。

「改訂」が424件で総エントリー数の1%と僅少ななのは、『和訳英辞林』では全エントリー

中の 14%にあたる 5,475 個も追加された新しいエントリーへの邦訳作りに力を注いだためと考えられる。

3.7 エントリーに対する邦訳語の改訂についての若干の考察

薩摩辞書が底本とした『改正袖珍辞書』からの邦訳の改訂量は「3.6 節」で述べたように僅少である、言い換えればあまり変更していない。それでも気の付くことを記す。

3.7.1 カタカナ表記の外来語

『改正袖珍辞書』ならびに初版の『英和对訳袖珍辞書』にカタカナで表記された外来語が数多く出ている。ここではカタカナ語と略称するが、蘭学が英学に切り替わる時期に作られた両辞書なので、そのカタカナ語にオランダ語に拠るものが多いと思いがちである。ところが実際には英語からの外来語がオランダ語からのものの 3 倍にもなる (三好彰 2009)。この傾向は薩摩辞書にも生きている。

(a) カタカナ語の表記法の変更

1 例としてエントリー *Buggy, adj.* を取り上げると、『改正袖珍辞書』は「「ビュグ」ノ多キ」と訳しており『和訳英辞書』と『和訳英辞林』では「ビュグノ多キ」としていて『改正袖珍辞書』がカタカナ語を蔽っていた「」を取り外しているが意味は変わっていない。『改正袖珍辞書』の記法は蘭学流儀を踏襲していたのだが、薩摩辞書は「」を取り払って現代に通じる流儀にした。

なお「ビュグ」は英語 *Bug, s.* を指している。ところが『改正袖珍辞書』はエントリー *Bug, s.* の邦訳を「虱ノ類」¹²としていて、この邦訳に「ビュグ」は出ていない。堀達之助編 (1862) と薩摩辞書でも同じである。つまり、この系列の辞書を利用する人はエントリー *Buggy, adj.* の邦訳「「ビュグ」ノ多キ」のビュグが *Bug* のことだと分かる英語力が必要である。

ところで『和訳英辞書』はカタカナに拠る発音表記で *Bug* を「バグ」としている。つまり現代人には理解しがたいのだが、*Bug* の発音「バグ」はカタカナ英語「ビュグ」と同じでないとしている。所詮、カタカナ英語は英語で無いというのだろうか。

(b) カタカナ語の見直し

カタカナ語の大半は『改正袖珍辞書』の表現のまま引継いでいるが、少しだけ見直しているので以下に記す。

- ・オランダ語に拠るカタカナ表現を止めた 2 つのエントリー (*Sea-sick* と *Dissenter*)

Sea-sick, adj. は『改正袖珍辞書』で「船ニ酔ヒタル、「セーシーキ」病名ヲ患ヒタル」であるが、『和訳英辞書』は「船ニ酔ヒタル、シーシツキ (病名)ヲ患タル」とした。オランダ語のセーシーキ *zeeziek* に拠っていたのを英語のシーシツキ *sea-sick* に変えている。

¹² 堀達之助編 (1862) の邦訳は「水虱」である。*Bug* にトコジラミ *Bedbug* の意味があるので虱の一種と見たようだが、水虱はトビムシであるから『改正袖珍辞書』が「虱ノ類」に改訂したのは妥当である。『和訳英辞書』と『和訳英辞林』は「虱ノ類」のままである。

Dissenter, *s.* は『改正袖珍辞書』で「異説ノアル人、「エンゲリス、チオルチ」ノ宗ニ背ク人」であり、この「エンゲリス」はオランダ語 *Engels* に拠っている。『和訳英辞書』で「異説ノアル人、イギリスチオルチノ宗ニ背ク人」とし「エンゲリス」を「イギリス」に変えた。なおイギリスはポルトガル語 *Ingelz* に拠っており現在でも使っている。そしてチオルチは英語 *church* である。なお『和訳英辞書』で *Church, s.* のカタカナに拠る発音表記もチオルチである。

・キリシトからキリストへ

『改正袖珍辞書』の邦訳に基督を「キリシト」とカタカナで書いたのがエントリー *Oracle* と *Millennium* の邦訳の中に出ている。薩摩辞書では、これらをキリストに変えている。そして『和訳英辞書』は *Messiah* の邦訳に、さらに『和訳英辞林』では *Anointed* の邦訳にもキリストが出ている。つまり『和訳英辞書』では3か所、『和訳英辞林』では4か所にキリストが出ている。その4件は次の通りである。

<i>Anointed, s.</i>	救世主 (キリストヲ云)
<i>Messiah, s.</i>	救世主 (キリストヲ云) 、成佛サセル人
<i>Millennium, s.</i>	千年 (西教ニテ千年ト云ルヲ云ウ此一劫ノ間悪鬼閉塞セラレテ人民ヲ罪ニ導クヲナクキリスト諸神ヲ使テ世界ヲ司ラシムト云)
<i>Oracle, s.</i>	巫 (キリスト宗ニテハ神ヨリ予言師ニ授ケタル辭)

江戸時代に刊行された蘭和辞典『和蘭字集』(桂川甫周編 1858) で基督は「キリシト」であるが、この辞書ではオランダ語の *st* をストとしておりシトになっていないので、キリシトはポルトガル語 *Christo* に拠ったと考えられる。

なお『和訳英辞書』は *Christ* のカタカナに拠る発音表記を「キリイスト」としている。つまり日本語では「キリスト」だが、英語での発音は「キリイスト」だと言っている。ともかく薩摩辞書は現在でも使っているキリストを採った早い時期の例である。

これらの背景に英語の普及がある。

3.7.2 英国英語と米国英語で意味が異なる *Trillion*

「3.4.1 節」で薩摩辞書が英国英語綴りから米国英語綴りに変えたエントリーがあることを述べた。似て非なることだが邦訳を英国英語での意味から米国英語の意味に変えた1例に *Trillion* がある。その邦訳は『改正袖珍辞書』で「百萬ヲ三度自乗シタル數」だが『和訳英辞書』で「百萬ヲ二度自乗シタル數」と改訳されて『和訳英辞林』に引き継がれている。*Trillion* は英国英語では 10^{18} (百万の3乗)であり、米国英語では 10^{12} (百万の2乗)であるから、英国英語での意味から米国英語での意味に改訂されたわけである。

ところが *Billion* は『改正袖珍辞書』、『和訳英辞書』、『和訳英辞林』で英国英語の「千億」(10^{12})であり、米国英語の10億 (10^9)を採っていない。それゆえこの1例からでも *Webster* 辞書を使ったとはいえ英国英語から離れて米国英語に切り替えたとは言えない。

4. まとめ

パソコン上に『和訳英辞書』と『和訳英辞林』およびその底本である『改正袖珍辞書』の全

ページの文字列を入力した写本を作り多角的に情報処理することで、この3つの辞書の改訂状況を数値的にあきらかにすることができた。

薩摩辞書である『和訳英辞書』と『和訳英辞林』はともに新しいエントリーを取り入れているが量的には『改正袖珍辞書』を引き継いだものが圧倒的に多いし、邦訳の改訂は量的に僅少である。

『和訳英辞林』の序文で述べているように誤謬の訂正に力を注いでおり、『英和对訳袖珍書』系列の完結版とみなせる。

『和訳英辞林』はその序文で Webster 辞書を使ってエントリーを増やしたことを述べている。エントリーの追加や邦訳の改訂状況から有力な候補となる Webster (1868) を割り出したが確定するまでに至らなかった。今後の課題とする。

参考文献

- Hepburn, Curtis(1867) 『和英語林集成』上海：American Presbyterian Mission Press
- 堀孝彦(2016)「堀孝之とその周辺」『東日本英学史研究』第15号, pp.39-52
- 堀達之助編(1862) 『英和对訳袖珍辞書』江戸：洋書調所
- 堀越亀之助編(1866) 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』江戸：開成所
- 堀越亀之助編(1867) 『改正増補 英和对訳袖珍辞書』江戸：開成所
- 井田好治(1963) 「薩摩の英学--その前史と「薩摩辞書」-1-」『鹿児島大学文科報告』第12号, PP.137-163
- 犬塚孝明(1974) 『薩摩藩英国留学生』中公新書
- 岩崎克己(1935) 『柴田正吉伝』東京：自費出版
- 門田 明(1991) 『若き薩摩の群像』春苑堂出版
- 桂川甫周編(1858) 『和蘭字彙』安政5年 [1858] 跋 江戸日本橋通：山城屋佐兵衛。
- 前田正毅、高橋良昭編(1871) 『大正増補 和訳英辞林』上海：American Presbyterian Mission Press
- 松田爲常、瀬之口隆敬、村松経春編(1873) 『獨和字典』上海：Amerikanische Missions
Buchdruckerei
- 三好彰(2007) 「新発見『英和对訳袖珍辞書』の草稿および校正原稿の考察」『英学史研究』第40号, pp. 87-103
- 三好彰(2009) 「英和对訳袖珍辞書における英語翻訳の考察」『英学史研究』第42号, pp.105-118
- 三好彰(2010) 「『英和对訳袖珍辞書』の書誌学的考察」『東日本英学史研究』第9号, pp.34-37
- 三好彰(2015) 「英国の新聞に見る薩摩藩英国留学生」『英学史研究』第49号, pp.74-84
- 日本経営史研究所編(1974) 『五代友厚伝記資料 四』東京：東京経済新報社
- OED (2009) *Oxford English Dictionary, Second edition on CD-ROM Version 4.0*, New York; Oxford University Press

- Picard, H. (1843) *A new pocket dictionary of the English and Dutch Languages: remodeled and corrected from the best authorities*. Zalt-Bommel: John Noman & Son, Netherlands.
- Picard, H. & Maatjes, A. B. (1857) *A new pocket dictionary of the English and Dutch Languages, 2nd ed., rev. and augm. by, A.B. Maatjes*. Zalt-Bommel: John Noman & Son, Netherlands.
- 杉本つとむ(1981)編 『江戸時代 翻訳日本語辞典』 東京：早稲田大学出版部
- 杉本つとむ(1985) 『日本英語文化史の研究』 八坂書房
- 高橋新吉編(1869) 『和訳英辞書』 上海：American Presbyterian Mission Press,
- 豊田實(1939) 『日本英学史の研究』 東京：岩波書店
- Webster (1862) *A Dictionary of the English Language*, London
- Webster (1868) (Academic Edition) *A Dictionary of the English Language, explanatory, pronouncing, etymological, and synonymous, with an appendix containing various useful tables, mainly abridged from the latest edition of the quatro dictionary of Noah Webster, LL. D., by William G. Webster and William A. Wheeler*, New York: Cincinnati

Considerations on Two English-Japanese Dictionaries Compiled by Satsuma Students in 1869 and 1871

Akira Miyoshi

Keywords: English-Japanese Dictionary, Satsuma Dictionaries,
Webster's Dictionary of the English Language

Abstract

After completing a digitization of the documents, the author analyzes the two Satsuma Dictionaries published in 1869 and 1871 which are successors of the first-published English-Japanese Dictionary compiled in 1862.

The author's numerical analysis of the two editions of the digitized Satsuma Dictionaries reveal how many entries were added or deleted, and how many translated Japanese expressions were corrected. New entries were taken from one of the Webster Dictionaries, and most deleted entries were old words which were rarely used or obsolete by the middle of the nineteenth century.

A possible candidate of the Webster Dictionary is the small one published in 1868, but further study is needed.

(みよし あきら)